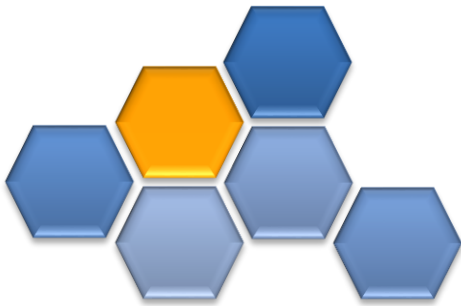


令和元年度 第3四半期運用状況 (厚生年金保険給付積立金)



1. 令和元年度第3四半期運用状況の概要

- 第3四半期末の運用資産額は、2兆3,490億円となりました。
- 第3四半期の修正総合収益率(期間率)は、プラス4.68%となりました。実現収益率は、プラス0.86%となりました。
- 第3四半期の総合収益額は、プラス1,065億円となりました。実現収益額は、プラス172億円となりました。

		前年度	令和元年度				年度
			第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期	
期末資産残高【時価】	億円	22,878	22,066	22,967	23,490	23,490	
修正総合収益率	%	1.35	0.01	1.11	4.68	5.85	
(実現収益率)		(2.84)	(0.66)	(0.45)	(0.86)	(1.97)	
総合収益額	億円	298	3	249	1,065	1,317	
(実現収益額)		(545)	(131)	(90)	(172)	(392)	

※ 年金積立金は長期的な運用を行うものであり、その運用状況も長期的な観点で評価すべきものですが、積極的な情報公開の観点から、四半期ごとに運用状況の公表を行うものです。

総合収益額は、各期末時点での時価に基づく評価損益の増減を含んでおり、市場の動向によって変動するものであることに留意が必要です。

(注1) 収益率及び収益額は、当該期間中に委託手数料等が精算された場合には、これを控除しています。

(注2) 収益率は、各期間に係るものです。

2. 令和元年度第3四半期の運用環境①

【第3四半期 令和元年10月～12月の運用環境】

➤ 株式市場

国内株式市場は、10月の消費税増税の影響、米中貿易協議を巡る動向及び世界景気への警戒感などから、神経質な動きで始まりました。その後、徐々に世界的な景気底入れ期待が高まる中、米中貿易協議に一定の進展が見られたことに加え、英国の合意無きEUからの離脱が回避される公算が高まったことなどを好感して、世界的に株式市場は反発上昇に転じました。日経平均株価は、年末にかけて24,000円台を一時回復するなど、前四半期末比で大幅に上昇しました。

外国株式市場は、10月初に発表された米景況感指標が軟化を示したことや企業業績の伸び悩み見通しなどを受けて、下落して始まりましたが、米中貿易協議における部分合意の観測が高まったことや、10月の米連邦公開市場委員会(FOMC)にて、本年3回目の政策金利の引き下げが実施されつつも、景気下振れリスクに対する予防的な金融緩和の必要性が薄れたことを好感して、NYダウなどは史上最高値を更新する動きとなりました。その後も、米中の経済指標に底入れ感が見えたことや、世界的に財政刺激策への期待が高まったことなどから、主要株式市場は更に上昇して終わりました。

➤ 債券市場(長期金利)

国内金利は、引き続きマイナス圏中心に推移しました。日銀は、10月末の金融政策決定会合で、海外情勢次第では躊躇なく追加の金融緩和措置を講じるとしましたが、海外金利の上昇等を受けて、国内長期金利は前四半期末比で上昇して終わりました。

米国金利は、10月のFOMCで政策金利の追加引き下げ観測などから低下して始まりましたが、米中貿易協議の進展期待やFRBによる政策金利の引き下げの打ち止め示唆などから、景気の下振れ警戒感が後退、金利は上昇して終わりました。

欧州金利は、欧州の景気底打ち期待の台頭から、ECBによる追加金融緩和観測の後退などを受け、上昇しました。

➤ 為替

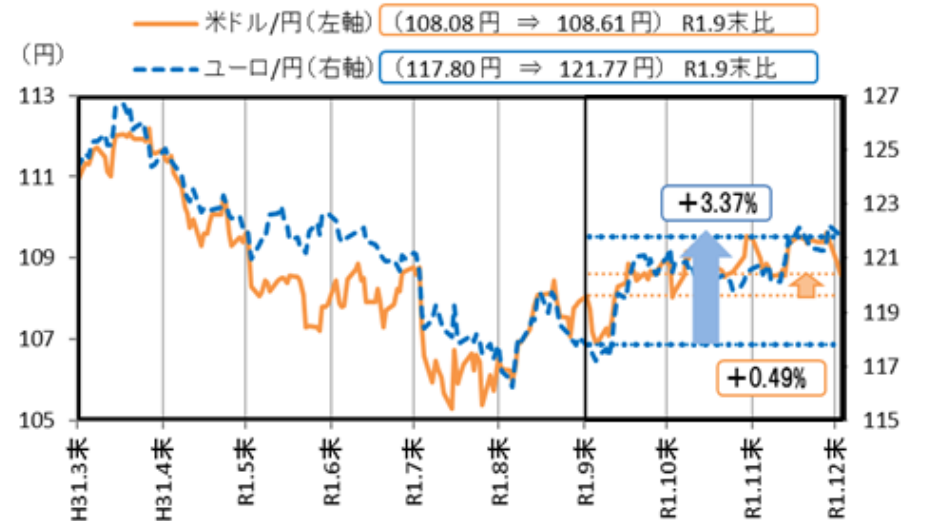
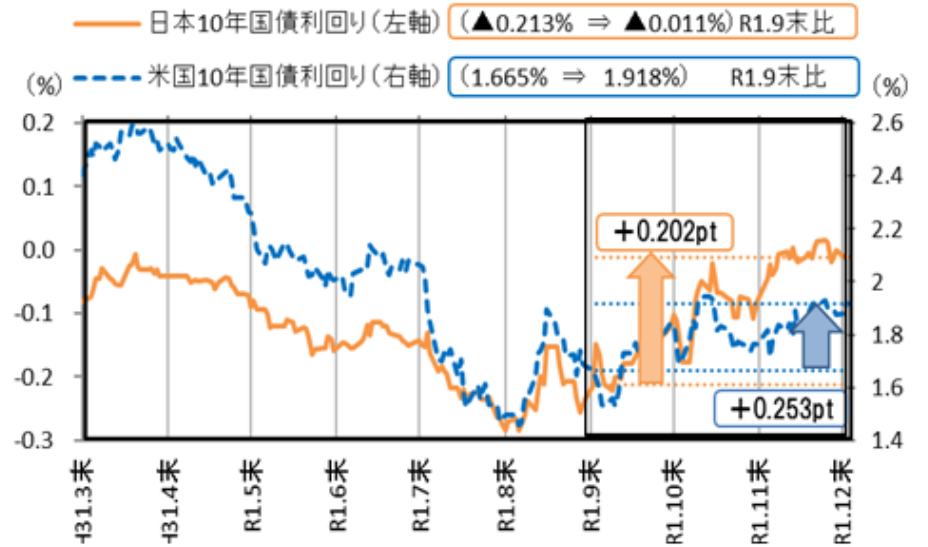
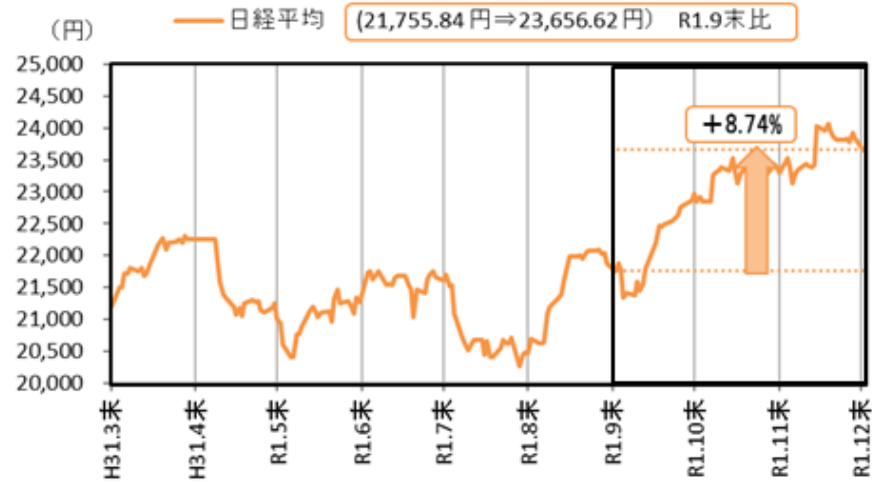
米ドル/円は、世界的な景気回復期待による市場のリスク選好の回復とともに円が下落する展開となり、小幅円安で終わりました。

ユーロ/円は、欧州経済指標の悪化に歯止めがかかったことやブレグジット(英国のEUからの離脱)に対する懸念が和らいだことなどからユーロ高円安傾向となりました。

参考指標

			H31年3月末	R元年9月末	R元年12月末
国内債券	日本10年国債利回り	(%)	-0.08	-0.21	-0.01
国内株式	日経平均	(円)	21,205.81	21,755.84	23,656.62
外国債券	米国10年国債利回り	(%)	2.41	1.66	1.92
	ドイツ10年国債利回り	(%)	-0.07	-0.57	-0.18
外国株式	NYダウ	(ドル)	25,928.68	26,916.83	28,538.44
	DAX	(Pt)	11,526.04	12,428.08	13,249.01
	上海総合	(Pt)	3,090.76	2,905.19	3,050.12
為替	ドル/円	(円)	110.86	108.08	108.61
	ユーロ/円	(円)	124.35	117.80	121.77

2. 令和元年度第3四半期の運用環境②



3. 収益率の状況

(単位: %)

区 分	前年度	令和元年度				年度
		第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期	
修正総合収益率	1.35	0.01	1.11	4.68	5.85	
(実現収益率)	(2.84)	(0.66)	(0.45)	(0.86)	(1.97)	
国内債券	1.07	0.30	0.27	△ 0.64	△ 0.05	
国内株式	△ 4.89	△ 1.89	3.52	8.88	10.65	
外国債券	4.20	0.42	1.24	1.54	3.21	
外国株式	7.23	1.28	0.02	9.82	11.14	
短期資産	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	

(注1) 国内債券には、貸付金を含みます。

(注2) 収益率は、当該期間中に委託手数料等が精算された場合には、これを控除しています。

(注3) 収益率は、各期間に係るものです。

(注4) 修正総合収益率は、評価損益の増減を加味した時価利回りです。

4. 収益額の状況

(単位: 億円)

区 分	前年度	令和元年度				年度
		第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期	
総合収益額	298	3	249	1,065		1,317
(実現収益額)	(545)	(131)	(90)	(172)		(392)
国内債券	71	21	19	△ 43		△ 3
国内株式	△ 282	△ 103	191	502		591
外国債券	125	13	38	48		99
外国株式	384	72	1	557		630
短期資産	0	0	0	0		0

(注1) 国内債券には、貸付金を含みます。

(注2) 四捨五入の関係で、各数値の合算が合計値と一致しない場合があります。

(注3) 収益額は、当該期間中に委託手数料等が精算された場合には、これを控除しています。

(注4) 収益額は、各期間に係るものです。

5. 運用資産額の状況

(単位: 億円)

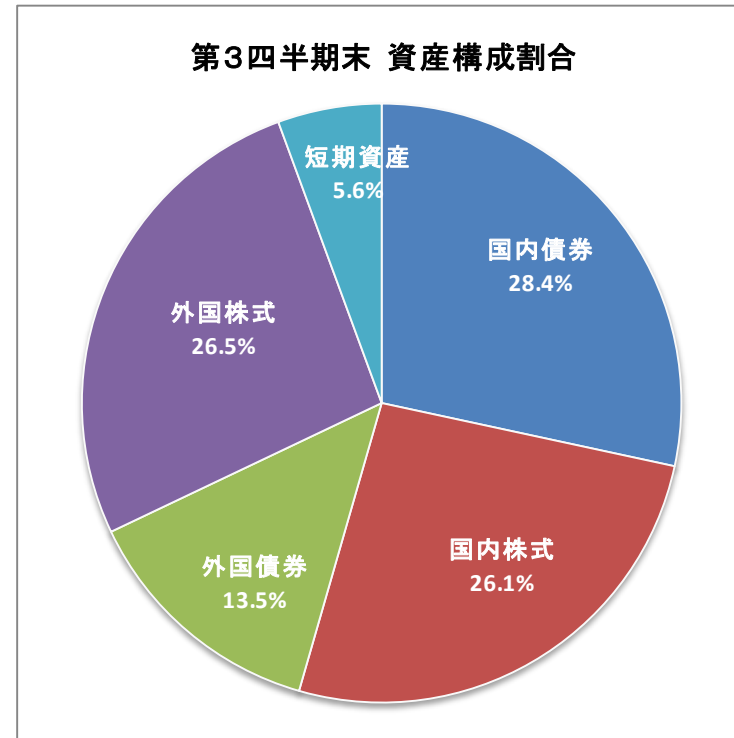
区 分	前年度末			令和元年度											
				第1四半期末			第2四半期末			第3四半期末			第4四半期末		
	簿価	時価	評価 損益	簿価	時価	評価 損益	簿価	時価	評価 損益	簿価	時価	評価 損益	簿価	時価	評価 損益
国内債券	6,506	6,828	322	6,522	6,849	327	6,389	6,710	322	6,407	6,668	260			
国内株式	4,589	5,332	743	4,840	5,429	588	4,849	5,620	771	4,939	6,122	1,183			
外国債券	3,045	3,068	23	3,060	3,081	21	3,073	3,119	46	3,092	3,167	75			
外国株式	4,008	5,587	1,579	4,056	5,659	1,603	4,100	5,660	1,560	4,143	6,217	2,074			
短期資産	2,064	2,064	0	1,049	1,049	0	1,858	1,858	0	1,316	1,316	0			
合 計	20,211	22,878	2,667	19,527	22,066	2,539	20,268	22,967	2,699	19,898	23,490	3,592			

(注1) 国内債券には、貸付金を含みます。

(注2) 四捨五入の関係で、各数値の合算が合計値と一致しない場合があります。

6. 運用資産別の構成割合

区 分	資産構成割合 第3四半期末 (令和元年12月末)
国内債券	28.4%
国内株式	26.1%
外国債券	13.5%
外国株式	26.5%
短期資産	5.6%
合 計	100.0%



(注1) 国内債券には、貸付金を含みます。

(注2) 基本ポートフォリオは、国内債券35%(±10%)、国内株式25%(±9%)、外国債券15%(±4%)、外国株式25%(±8%)です。

(注3) 外国債券のうち4.8%はオルタナティブ資産(海外不動産ファンド)ですが、年金積立金全体に占める割合は0.6%(基本ポートフォリオでは上限5%)です。

(注4) 四捨五入の関係で、各数値の合算が100%にならない場合があります。

7. 用語説明

- 総合収益額

時価に基づく収益額を把握するために、利金・配当金や売買損益などの実現損益と未収収益の増減に、評価損益の増減を加えたものです。

$$\text{(計算式) 総合収益額} \\ \text{実現損益} + (\text{当期末未収収益} - \text{前期末未収収益}) + (\text{当期末評価損益} - \text{前期末評価損益})$$

- 修正総合収益率

運用成果の評価方法の一つで、簿価ベースの平均残高利回りに時価の概念を導入した収益率です。

分子は総合収益額を用い、分母は時価総額の平均残高に近似させるため、簿価の平均残高に前期末の未収収益と評価損益を加えています。期間中の資金追加・回収が収益率に影響を与えるという特徴があります。

$$\text{(計算式) 修正総合収益率} \\ \frac{\text{実現損益} + (\text{当期末未収収益} - \text{前期末未収収益}) + (\text{当期末評価損益} - \text{前期末評価損益})}{\text{期中元本(簿価)平残} + \text{前期末未収収益} + \text{前期末評価損益}}$$

- FRB

連邦準備制度理事会(Federal Reserve Board)の略称であり、米国の中央銀行制度の最高意思決定機関です。

7名の理事で構成され、全米12の地区の連邦準備銀行を監督し、FOMC※において金融政策決定を主導します。

※ FOMC(連邦公開市場委員会 Federal Open Market Committee)・・・FRB理事7名と連邦準備銀行の総裁から選ばれた5名を合わせた12名の委員によって年8回定期開催され、金融政策としての公開市場操作方針等を決定します。

- ECB

欧州中央銀行(European Central Bank)の略称であり、EU加盟国のうち欧州統一通貨「ユーロ」を採用している国々(ユーロ圏)の金融政策を担う中央銀行です。

ECB役員理事会の6名とユーロ圏各国の中央銀行総裁で構成される「政策理事会」が月2回開かれ、公開市場操作等の金融政策の決定を行います。

- 金融緩和政策

中央銀行が不況時に景気を刺激するために行う金融政策のひとつです。金利の引き下げや、国債の買い上げなどを行うことによって通貨の供給量を増やし、企業や個人の資金調達を容易にすることで経済の活性化を目指します。

7. 用語説明

- 地政学リスク

ある特定の地域が抱える政治的・軍事的な緊張の高まりが、地理的な位置関係により、その特定地域の経済、もしくは世界経済全体の先行きを不透明にするリスクのことを言います。平成14年9月に米国のイラク攻撃について、FRBが当該用語を使用して以来、マーケットで広く認知されるようになりました。地政学リスクが高まれば、地域紛争やテロへの懸念等により、原油価格や株式相場、為替相場等の経済的変動を引き起こし、企業の投資活動や個人の消費心理に悪影響を与える可能性があります。具体的事例としては、東アジアにおける北朝鮮情勢、欧州・中東におけるシリアを巡る動きから生じるリスク等が挙げられます。

- 政治リスク

一般的には、政情が不安定な国に対して投資する際に負うリスクのことを言います。その意味では、カントリーリスクとほぼ同義と言えます。投資先の国の政治混乱等により投資資金の回収が困難となったり、価値が下落するリスクとなります。また、選挙等の政治的な重要イベントが、その国、或いは地域の政情、経済の先行きを不透明にするリスクも含まれます。

- 長短金利操作

平成28年9月に日銀が導入した金融政策「長短金利操作付き量的・質的金融緩和」のうちの「長短金利操作」のことを言います。別名、「イールドカーブ・コントロール」とも言います。金融市場調節により、長期金利と短期金利の操作を行うことを指し、具体的には、短期金利は日銀当座預金のうち政策金利残高にマイナス金利を適用する一方、長期金利は10年物国債利回りがゼロ%程度で推移するように、日銀が長期国債の買入れを行い、短期金利より長期金利の方が高い状態にする操作のことになります。従って、様々な要因により長期金利が上下に変動する場面もありますが、日銀による当該操作が続く限りは、10年物国債利回りがゼロ%水準から大きく乖離する可能性は低いものと思われれます。